様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011～2013
課題番号：２３６５２０６２

研究課題名（和文）家のイデオロギーを掘り起こす―郊外小説から見た社会とコミュニティの断面図

研究課題名（英文）The Archaeology of the Ideology of Houses: An Aspect of Modern English Society and Community in Suburban Novels

研究代表者
大石　和欣（Oishi, Kazuyoshi）

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：５０３４８３８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,700,000円、（間接経費）　810,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、19世紀末から20世紀前半のイギリス文学に見られる居住環境や建築物の表象を研究対象に据えることで、これまで看過されてきた郊外小説を中心とする文学作品群を掘り起こし、同時代の文脈と併置しながらその社会的な意味を明瞭に浮かび上がらせたものである。都市郊外に居住する下層中流階級の凡庸な日常生活を淡々と描いた郊外小説はこの時代に人気を博した大衆文学である。しかし、そこには都市内部の衛生問題や貧困問題から距離をとった生活、核家族化し、孤立化していく郊外居住者の生活観、また１９世紀的な市民社会とは異なる個人主義的なコミュニティが垣間見える。現代の都市計画問題にも示唆を与える研究である。

研究成果の概要（英文）：This ressearch examined the ideological ramifications of the images of houses as they are represented in so-called 'suburban novels'. Suburban novels were immensely popular at the turn of the twentieth century, especially in the 1900s and 1910s, but they have been entirely eclipsed by Modernist Literature in the current history of English Literature. Houses described in these novels reflect the ideology of the lower middle-class people who began to enjoy their lives in the suburban residential areas: their lives were individualised and had far less civic pride or communal commitments than those in the Victorian period. Far from the unsanitary, noisy, and crowded lives at the centre of the city, they created an artificial utopia of petite bourgeois. Their life style suggests the way in which literary studies provide useful materials for studies in social history, sociology and urban planning.

研究分野：文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：郊外小説　モダニズム　建築文学　大衆小説　中流階級　エドワード朝　都市文学　生活環境

１．研究開始当初の背景

イギリスの建築雑誌 *The Architect* は、1891 年に「いつの時代でも、どこの国でも、時代の精神は人々が住む家に示唆される」と記述し、1895 年には「私たちの平凡な日常的環境が性格や考え、思考・行動様式におよぼす影響」は甚大であると主張する。当時こうした建築雑誌が多数流通していたのだが、その原因には、未曾有の郊外住宅建築ラッシュが進んでいた一方で、都市内部において不衛生で古い建築物を一掃しようとする都市計画が持ち上がりはじめていたことがある。大英帝国の衰退期にあって国力の低下を意識しはじめたイギリスでは、緑豊かで健康的な生活環境を国民に確保する動きが生まれ、結果的には National Trust 運動の興隆や“Englishness”というイデオロギー創出へといたることになる。とすれば、上述の郊外小説に描かれた郊外住宅は、そうした一連の動きと密接に絡み合った精神、思考・行動様式を表象していると解釈できないのであろうか？この問題意識が本研究を遂行しようとするに至った根本的な動機であり、文学的表象としての家が内包するイデオロギーを社会的文脈から解明しようというのが本研究の眼目であった。

２．研究の目的

本研究は、19 世紀末から 20 世紀前半のイギリス文学に見られる居住環境や建築物の表象を研究対象に据えることで、これまでの文学史では看過されてきた郊外小説を中心とする文学作品群を掘り起こし、同時代の文脈と併置しながらその社会的な意味を明瞭に浮かび上がらせることを目的とした。Arnold Bennett, William Pett Ridge, Keble Howard などの小説は、都市郊外に居住する下層中流階級の凡庸な日常生活を淡々と描き、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて人気を博した大衆文学である。しかし、都会的なモダニズム文学が台頭すると、狭量かつ旧世代的なものとして文学史からも忘却されてしまった。しかし、家自体にはその時代の重要なイデオロギーが内包されているはずで、それを歴史的に掘り起こすことにより、当時の郊外をテーマとする文学作品の新たに断面図を切り取って提示することができると考えた。生活環境や都市開発の問題が山積する現代社会にも意義ある提言ができる豊かな可能性を秘めた研究にすることを目指して研究を進めた。

本研究では、従来の文学史を書き換えることはできないにしても、建築や生活空間、コミュニティの変容をテーマにすることで、看過されてきた郊外小説の社会史的価値を再認識すると同時に、これまでバラバラに分断化されて論じられることが多かった Bennett から Gissing, Forster, Lawrence らの作品を、郊外住宅に内包されたイデオロギーを共有する文学作品としてつなぎとめ、新しい角度からこの時代の文壇の断面図を提示しようと試みた。

文化史や歴史学の領域に踏み込んだ文学研究は近年盛んであるが、本研究では、安直に建築史や社会史の研究成果に依拠して文学を読み込もうとするものではなく、郊外住宅に関する文学作品や言説に描きこまれた家屋や建築物、それらが醸成するコミュニティに着目することで、文学が本来豊かに保有しているはずの社会的意味を掘り起こし、現代的な視点から再度意義づけを試みた。

３．研究の方法

平成23年度

［概要］郊外小説の諸作品について段階的に調査を進めながら、郊外についての社会史や建築史の領域における研究成果についてはその全体像を俯瞰することで、郊外小説の問題点等を洗い出した。3月までには研究の流れを決定し、特定の郊外についての考察をまとめた。

［詳細］

1) 一次資料の収集と調査・分析（通年）
郊外小説や関連する作品は、著名な George and Weedon Grosmith, George Gissing, H. G. Wellsや E. M. Forsterを別にすれば、国内に所蔵している図書館はほとんどない。これまでは個人的に古本屋で見つけたもののみをその都度購入してきたにすぎないが、本研究では William Pett Ridge、Keble Howard, Arnold Bennettをはじめとして、まだ知られていない郊外を舞台にした小説を重要資料として入手し、調査と分析を進めた。

2) 社会史・建築史の領域における二次資料の収集と調査（9月～3月）
社会史や建築史の主な研究成果も平行して調査・分析したが、主な郊外小説作品を後半に読みこんだ。

3) ロンドン近郊の古地図調査と現地調査　[Part I]　（12月～2月）
現在のロンドンは19世紀末から20世紀初頭のロンドンとは景観としてかなり様変わりしている。郊外小説の舞台となっている19世紀末の郊外が必ずしも当時のまま残っているわけではない。それでもロンドン南部のCamberwell地域や北に位置するHampsteadなど、当時の街並みを維持した郊外も少なくない。1）の調査からCamberwellをはじめとする複数の郊外小説の舞台を固定し、現

在の地図と19世紀中葉から20世紀前半にかけての複数の地図を比較した上で、郊外住宅の展開を確認した。2）の調査から割り出した19世紀末の郊外住宅の建築様式を参考にしながら、2~3の地域を選別して2月に10日間ほど現地へ赴き、郊外住宅とコミュニティについて確認した。国立古文書館や地域の関連施設において、当時の住民の生活様式を照射する資料を調査した。

4) 第一段階の取りまとめと研究の大枠を決定　（3月）

3）の現地調査を経て、その特定の地域に限定した郊外の歴史的変遷を俯瞰すると同時に、そこを舞台とする郊外小説の位置づけを行い、論考の形で３月末日までにとりまとめた。同時に、問題点と研究内容の枠組みと流れを確認・決定し、次年度、次々年度で成果をあげることができるように研究計画を見直した。

平成 24 年度

［概要］1年目の資料分析と現地調査に基づいて郊外小説から解読できる郊外の社会的位置づけを行い、社会史や建築史の領域にさらに踏み込んで立証した。社会史や建築史の領域でも未確認の論点については、研究会で発表した。未収集の郊外小説については調査を継続しながら、郊外のユートピアという神話を構築していく要因となった思想や言説についても調査を進めた。

［詳細］

1) 社会史･建築史の領域で使う一次資料の収集と調査

平成23年度2月の調査の際に収集した資料を基礎にしながら、Clapham や Camberwell、Bedford Parkについての生活様式、コミュニティの構造、歴史的文脈等を確定した。9月初旬に2週間程度の現地調査を行い、追加資料調査を行った。調査し残した一次資料や郊外についての新聞記事等に着目しながら、コミュニティと住居についての調査を進めた。

2) 郊外小説に関する一次資料の収集（購入）と調査・分析

読み切れていない重要な郊外小説の作品を読むことと、郊外へ移住する人々が抱き、流布することになったユートピアとしての郊外という神話を構築したイデオロギーについての調査に着手した。都市内部の劣悪な生活環境を暴露することになったルポルタージュ風の小説あるいはジャーナリストの言説等も比較対象として重要である。また、William Morrisのユートピア文学と彼の自宅Red Houseは、ロンドン西武の郊外住宅地Bedford Parkに典型的に見られるように、ロンドンの郊外住宅地のモデルとなって浸透していく。そうした言説にも積極的に調査を行った。

3) 1), 2)の調査を踏まえながら、平成23年度とは別の地域についての郊外小説についての論考を執筆した。とくに郊外小説を形作っているイデオロギー的基盤を明瞭することで、郊外住宅地の建設と街並みが、同時代に進展したNational Trust運動や社会福祉の諸問題と対策との積極的なかかわりをもったものとして捉えることが可能である。

平成25年度

［概要］1～2年目の資料分析と現地調査に基づいて、本研究の問題意識の根底にあった郊外小説の住宅・建築物に賦与されたイデオロギー的意味について、いっそう踏み込んだ調査と考察を加えた。ユートピアとしての郊外住宅のイメージは、根底において第一次世界大戦期に文壇に登場するGeorgian Poetryなどの田園詩、さらにはNational Trustなどにも共通する“Englishness”というイデオロギーと密接な関係性を保っている。それらを含めた郊外小説についての最終的な資料調査を行った。国内では不可能な郊外の生活環境についての一次資料調査、未調査の郊外地域についての現地調査を9月に20日間かけて行い、その後は国内において調査結果をとりまとめながら、マイクロフィルム等を使用して研究成果を論文としてまとめた。また、ロンドンの建築物についての論考のなかに郊外のセクションを組みこんだ。

［詳細］

1）資料の最終的な収集と調査（4月～12月）

1～2年目で収集できなかった資料、とくにこの時代のイギリス建築産業界の雑誌や機関紙における郊外住宅の位置づけや郊外生活環境についての見解について考察を行った。Georgian Poetry や“Englishness”のイデオロギーを構築することになった文学作品や言説を追跡することで、郊外住宅とのイデオロギー的リンクについて立証した。国内では不可能な資料・現地調査については、9月にかけて20日間かけて行った。

2）論文の執筆と発表・投稿（1月～3月）

3年間の研究成果を取りまとめた。1～2年目で執筆した論考を土台としながら、本研究の総決算として郊外小説に描かれた住宅が包摂するイデオロギー的意味合

いを明瞭にした。平成26年度内に脱稿して、出版予定である。

４．研究成果

郊外小説は、19 世紀末に発展した郊外住宅地の生活を繊細かつ緻密に反映し、その中心に家や住居の描写を据える。郊外住宅は、都市内部の貧困やビジネスの世界から距離を取った郊外において、塀によって公共の空間から隔離され、小さな庭を確保したプライヴェートな緑の楽園として立ち現れる。生活環境の豊かさを希求した中流階級の夢の帰結が郊外住宅だったのである。この時代にとくに郊外を形容する表現として picturesque という言葉が用いられ出すが、それは風景画において貧民やジプシーなど前景に描き込むことで野趣にとんだものにする 18 世紀的な美学的概念とはことなり、ロンドンの貧困層や労働者階級から距離をとることで構築された人工的な田園風の郊外風景に適用されるものであった。底流においては William Morris が自宅 Red House、あるいは小説 *News from Nowhere* で示唆したユートピア的中世世界へとつながり、住宅改善運動と共有地保存運動が合流した National Trust 運動とも連動していく。

しかしながら、1870 年代からの農業不況により多くの人口が農村から都市郊外へと流入する中で、郊外は旧来の農村地域が保持したコミュニティ内の温情的交流を喪失してしまったようにも思われる。18 世紀から 19 世紀の都市ルネッサンスを推進した市民精神でもある Civic Pride が郊外住宅を描いた郊外小説には欠如している。社会史の領域においてもそこまで踏み込んだ実証的研究は少ないが、核家族化した郊外の居住者たちのこじんまりとした生活には新たな都市ルネッサンスを構築するコミュニティ精神は抜け落ちてしまっている。

Virginia Woolf が“Mr. Bennett and Mrs. Brown”において、「家」の外観と構造ばかりを描いて登場人物の内面に入り込むことがないと批判した郊外小説は、実のところ重要かつ歴史的な生活環境の記号を内に抱え込んでいて、モダニストやモダニズム研究はそれに気付かないまま文学の見取り図を描いてきた。この時代のイギリス文学史においては、大英帝国が衰退し、二つの大戦を経験する歴史的過程を横目で眺めながら、ワイルドなどの世紀末文学、モダニズム、その後の W. H. Auden をはじめとする詩人や George Orwell などを中心に俯瞰するのが通常であった。Virginia Woolf が批判したように、登場人物の意識の流れに入りこむことがなく、住居などの外面的描写に終始する郊外小説は、ちょうどヴィクトリア朝期のネオ・ゴシック建築物がモダニズム建築物によって一掃されていったように、1920 年代以降文壇から駆除されてしまうことになったのである。

しかし、住居と建築物、またそれらを取り囲むコミュニティを軸として歴史と文学を振り返ると、まったく異なる文芸潮流が見えてくる。歴史的には、1870 年代の農業不況による農村コミュニティの崩壊、農村からの人口流入を抱えた都市における郊外化現象、1894 年のロンドン建築法と 1919 年の住宅および都市計画等法、相続税の税率修正と第一次世界大戦という一連の出来事は、多様な形態の郊外住宅の乱立、都市内部の不衛生な生活環境の改善、田園都市計画の展開、19 世紀的ネオ・ゴシック建築の衰滅とモダニズム建築の台頭、貴族の没落に伴うカントリー・ハウスの売却・崩壊という建築的現象を誘発することになった。そうした社会風景は、郊外小説のみならず、Thomas Hardy の作品、郊外・都市生活を対比的に描いた George Gissing, H. G. Wells, Jerome K. Jerome, E. M. Forster の小説、D. H. Lawrence の *Lady Chatterley's Lover* や Daphne du Maurier の *Rebecca* に典型的に描かれたカントリー・ハウスの崩壊、その一方で“Englishness”という仮想的な美徳を具現した田園生活への憧憬を描いた Georgian Poetry の詩群などの文学作品の中に克明に刻みこまれている。

扱う作品と領域が多岐にわたり、本格的な基盤研究として行うためにはまだ資料調査や社会史・建築史の研究のフォローが不十分である。それゆえ 3 年間の挑戦的萌芽研究として、研究の地盤を築く必要があった。しかし、3 年間地道に研究を遂行することによって、国内外においてこれまでに提示されたことのない新たなイギリス文学研究の座標軸の輪郭は描くことができる基盤が十分整ったと自負している。まだ、国内に所蔵がない郊外小説資料を収集し、所属大学図書館の所蔵とすることで、国内研究者への便宜を図ることもできたと考えている。今後より大きな体系的研究として発展させていくべく研究を整理していきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）

大石和欣（単著）「亡霊たちの語り―ハムレット、マキューアン、ゼーバルト」『日本英文学会　中部支部プロシーディングズ』（2012 年）185－86 頁。

大石和欣（単著）「建築物の詩学 ― 奇矯なるジョン・ベッチャマンの戦い」『建築物の詩学 ― 奇矯なるジョン・ベッチャマンの戦

い』19 号（2012 年）60－99 頁。

大石和欣（報告）「ヴィクトリア朝建築の詩学 ― 桂冠詩人が守った街並み」『The Victorian Studies Society of Japan Newsletter』 第 10 号（2011 年）8 頁。

大石和欣（書評論文）「Nicola J. Watson, ed. Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture (Basingstoke: Palvgrave Macmillan, 2009)」『ヴィクトリア朝文化研究』第 9 号（2011 年）9-13 頁。

大石和欣（報告）「『精神の所有物』の継承～ナショナル・トラストとイングリッシュネスの再構築」『イギリス哲学研究』第 34 号（2011 年）119-21 頁。

〔図書〕（計　1　件）
大石和欣（共著）『西洋近代の都市と芸術―ロンドン』（竹林舎、2014 年）

６．研究組織
(1)研究代表者
大石和欣
（東京大学総合文化研究科・准教授）
研究者番号：50348380